

特集

地域をつくる学び合い

町田市子どもセンターばあん

① “けがと弁当、自分持ち” —町田市子どもセンターばあを支える活動より—

町田市子どもセンターばあは、0歳から18歳までの子どもと乳幼児の保護者を対象とした施設です。今回は、ばあんの奥津館長とばあんを支える地域の大人でつくる「ばあんの会」の岡本さんから、子どものために地域の大人たちは何ができるのか、またばあんを支える活動から何を学んだのかを伺いました。

② 子どもを中心に

ばあんには現在、学校関係者や地域の人で組織されている運営委員会がありますが、当初は、運営委員会が設置されませんでした。それは、奥津館長に「融通のきかない、大人の論理の運営委員会になってしまったら・・・」という不安があったからです。そこで、ばあんの建設にあたって組織された子ども委員会（小学校4年生から高校3年生までが対象）が、施設のルールや運営にかかわる問題など様々なことを話し合い、実質の運営委員会の役割を担いました。そして、奥津館長をはじめとするばあんのスタッフやばあんの開設に向けて大人で組織された運営準備委員会や「ばあんの会」が子ども委員会を裏で支えるという形をとりました。開設から1年、子ども委員会のがんばりを見た大人たちは運営委員会の設置にあたり、子ども委員代表2名が加わることを了承し、なんと運営委員会の正・副委員長に子ども委員代表を選出したのです。

利用者である子どもを中心に据え、地域の人たちと話し合いをしながら運営してきたばあんは、本当に地域の人たちに支えられている施設だと奥津館長は話します。



取材の日もたくさんのお子どもがおとずれていました。

③ 活動から学んだこと

岡本さんは、運営準備委員会からばあんにかかわっていました。岡本さんはばあんの他にも、「子ども広場を考える会」など地域の活動を行っています。これらの活動の原動力は、地域の子どもの育てるのは自分たちだという思いだそうです。そして、活動をとおして子どもと接することで学んだことは、子どもを見るとき大人の視線の大切さだといいます。「大人の都合のいい子ども」を求めているかということが問われるのだと思います。また、活動をとおして行政とやり取りする中で、要求するばかりではだめで、行政と市民がお互いの立場や役割を活かすことの必要性を学んだということです。

ばあんの運営の根幹となるルールは、「けがと弁当、自分持ち」です。子どもを信頼してきちんと責任を持たせること、大人は覚悟を決めて辛抱強く子どもを見守ること、そんなばあんにおける子どもと大人の間を象徴しているルールだと思いました。



「ばあんの会」の岡本さん



奥津館長